山と花のたより 214号

２０１８年６月１５日　　松尾　忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
ＨＰ http://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/

鳥取県側から登った扇ノ山と氷ノ山

５月 24～25 日、健生会友の会山歩きクラブの例会登山で兵庫･鳥取県境の２つの山に登った。二山共、兵庫県側からの登山は経験済みだが、西側からはいずれも初めて。

チャーターしたバスは中国自動車道から鳥取自動車道にはいり、智頭町を抜けて北進、河原城を遠望して右折、八頭（はっとう）町内を東進して安徳の里姫路公園で昼食休憩。

↑タニウツギ

全国各地にある安徳天皇終焉の地

「安徳の里」は源平合戦で亡くなった安徳天皇の終焉の地伝説に依るという。この「安徳天皇終焉の地」伝説は西国だけでなく全国各地にある。いわゆる貴種流離譚（きしゅりゅうりたん）の代表的な物で、安徳天皇が八歳で壇之浦に入水したという悲劇のヒーローだけに日本人の「判官びいき」に訴える面があったのだろう。

↓イワカガミ

新緑に映える初夏の花々

山間を走るバスの車窓からは眩しいばかりの新緑とその中で際立つ各種の花が見えた。ピンクのタニウツギ（濃淡様々）、純白のウツギやホウ、紫のキリなどが私たちの目を楽しませた。

姫路の里公園ではサラサドウダンが花を満載していたし、登山口からの道も花が多かった、チゴユリ、ユキザサ、サンカヨウ、トチ、イワカガミ、エンレイソウなどなど。

快晴のもと、順調に歩いて、予定通り扇ノ山頂上（標高１３１０ｍ・３００名山）に。木々の梢に遮られて日本海は見えなかったが、他の方面には兵庫・鳥取両県にまたがる緑の山々が重畳として広がっていた。

氷ノ山の西の登山基地＝氷太くん

この日の宿舎は鳥取県若桜（わかさ）町の「高原の宿・氷太くん」。山の斜面を切り開いて、キャンプ場、グランドと共に大型の宿泊施設が建てられている。

↓ユキザサ

各種スポーツなどの合宿所として活用されているし、冬はスキー客で賑わうそうだが、鳥取県側からの氷ノ山登山の格好の基地でもあった。

緩やかな半円形の建物も各種施設も好感の持てるものだったが、造成地の斜面や道路の法面にメキシコ原産のイタチハギが咲き誇っていたのには強い違和感をもった。こんな山の中にまで、外国産の植物をなぜ植栽するのだろう。

↑イワカガミ

久しぶりの氷ノ山に

翌２５日、朝食をおにぎりにしてもらって、６時には宿を出発。車道からキャンプ場を抜けて登山道へ。この日も好天、ギンラン、コケイランを道端に見て、杉林の中をジグザグに登っていく。ゆっくりだが、着実に高度を稼いでいる。

クルマバソウ、ツクバネソウのほかアブラナ科の小さい白い花が多いが種名がわからない。イワカガミの色の変化を楽しみながら歩くと、ルイヨウボタンが次々と現れた。「葉がボタンの葉に似ている植物」＝「類葉牡丹」という意味の名を付けられているが、少しかわいそうな気がする。淡緑色の可愛い花なので、それにふさわしい名を思いつかなかったのだろうか。

ルイヨウボタン↑

ネマガリタケは美味しかったのだろうか

ウグイスの囀りと共にホトトギス、カッコウの声を聴きつつ登り、７時過ぎには氷ノ山越（標高１２５０ｍ）に到着。ここで兵庫県側からの登山道と合流。山頂へと続く稜線はブナの自然林の中を歩くが、道の両側にはチシマザサ（別名ネマガリタケ）がびっしり。東北や北陸の山宿ではよく出される美味しい山菜だけに、女性たちが盛んに採取していたが、果たして食べられたのだろうか。

ゆったりした計画でゆっくり歩く楽しさ

８時４０分には氷ノ山頂上（１５１０ｍ・２００名山）に着き、食事と展望を楽しみつつ、他の登山者とも交流。往路を引き返して１１時３０分に「氷太くん」に帰着、入浴後、おいしい昼食をいただいて、１３時１５分に帰路についた。

ゆったりした日程で、ゆっくり歩き、初夏の山を存分に満喫した山行だった。

↓クリンソウ

奈良・金剛山でも夏の花々が

６月４日わらび採りに行く妻の車に便乗して、大阪・千早赤阪村の青崩（あおげ）登山口まで送ってもらい、金剛山に向かった。ここでも林道の斜面にはイタチハギが生い茂っており、複雑な思いを持ちつつ、先を急いだ。

クサノオウ、タツナミソウなどを見ながら行くと、林道終点で以前あった橋がなくなっており、国見城跡の手前では登山道崩落で通行止めとなっていた。

がっかりしたのはシラネアオイなどが植えられていた「千早園地」花園の荒廃だった。通行止めで手入れもされず花も少なかった。

でも転法輪寺の境内ではクリンソウとオオヤマレンゲが見ごろを迎えていた。

↓オオヤマレンゲ